シンポジウム「1930年前後の文化生産とジェンダー」をめぐって

会期：2018年1月20日、21日
会場：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

陳晨

「我々はバックミラーを通して現代を見ている。われわれは未来に向かって、後ろ向きに進んでいく。」
マーシャル・マクルーハン

1. はじめに

「アジアの中の日本文化」センターでは、毎年、多種多様なテーマでの国際シンポジウムが開催されてきたが、今年は、1月20日から21日にかけて、「1930年前後の文化生産とジェンダー」というテーマで、日本初のジェンダー専門図書館[1]として11月に開館したばかりの「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」を会場として、開催された。

シンポジウムのパンフレットの巻首に主旨が記されていた。まず、1930年代に焦点を当てる理由に関しては、「1930年前後は、戦期間に湧出した多様な文化が混沌として交錯した時期である。「エロ・グロ・ナンセンス」の昭和モダニズムの一方には、左翼思想の風が激しく吹き、大正期のリベラルな思想がその渦の中で再構成されている」と説明されている。そして、ジェンダーという視座を導入させる必要性に関しては、「この時期の文化に関する従来の研究は、主として男性の知識人や表現者を対象としており、女性に関心が向けられた場合も「モダンガール」などの語られた女性像について論じられてきた」という状況に言及し、「本シンポジウムでは、これまで明らかにされてこなかった文化を生産する側の女性たちの動向に光をあてる。1930年前後、女性知識人や女性表現者は、何を語り、どのように生きたのか」と説明されている。シンポジウムに合わせて、同ライブラリでは、学術的な議論だけではなく、東アジアを視野に入れた資料展示「『女人芸術』という回路」も開催された。1930年代の日本・台湾・中国・韓国における女性を主体とした文化生産の諸相をめぐる貴重な展覧会であった。

私は、二日間にわたってシンポジウムの全プログラムに参加した。私自身はこれまで1980年代第2波フェミニズム以降の時代に生まれる若い世代の女性たちを取り巻く今日の文化と文学について論じてきた。現在では、教育や雇用の機会、私的空間やメディア表象における性差別の是正の目標はある程度達成されている。私が焦点を当ててきたのは、つまり、女性たちが比較的自由に生きる権利を得た後の時代における女性表現者とそのパフォーマンスといえる。現在と1930年代の文化状況には、そのような異なりがあるのだが、次世代のジェンダー研究者を目指す者として、今回の各々のプログラムに触発され、それをきっかけに改めて考えたジェンダー研究の方法論やその意義に関する問題意識を、少しでも多くの人たちと共有したいという気持ちに駆られている。

本稿では、今回の国際シンポジウムで問われていた主要な論点を振り返るとともに、それぞれの応答から、脱構築の効力と相対化の契機を常に孕むという分析のアプローチとしてのジェンダーの有効性と、「女性」カテゴリーの複数性・競合性という女性の主体性に関する認識の枠組みの歴史的射程を今日につながるメッセージとして再確認したい。

2. 1930年代に性を語るということ

1930年代において、性はどのような文脈の中で言説化されていたのか。例えば、報告者の中谷いずみ氏が、「資本主義に対する闘いによって女性の解放も実現するという考え方が登場し始めた」と指摘したように、この時期、性についての議論は常に資本主義への反発のなかに組み込まれて言説化されていたのである。すなわち女性の解放がマルクス主義の枠組みに回収される形で提起されて議論されるようになったことはこの時代の特徴である。この特徴こそがシンポジウムの「セッション1：マルクス主義におけるジェンダー表象」で共有されている重要な同時代背景である。

呉佩珍氏「女性解放と恋愛至上主義とのあいだ－大正、昭和期におけるコロンタイ言説の受容」は、ソビエト・ロシアで婦人政策担当部局の女性部を創立した女性政治家のコロンタイと彼女が実践した社会主義フェミニズムの思想が日本で翻訳、紹介された経緯を辿りながら、1930年代の日本国内における女性解放論と恋愛言説にどのような影響と変化をもたらしたかを検証した。そして、この社会主義陣営からきたコロンタイと彼女の女性解放論の影響は一国主義にではなく、当時の植民地朝鮮にも浸透し、植民地朝鮮の知識人たちの関心を強く惹きつけたことは、李恵鈴氏の「社会主義運動とモダンガール－韓国近代長編小説の様式におけるある秘密」で報告されていた。当時の韓国は植民地支配というもう一つの不条理な権力に搾取されているため、コロンタイを含めた社会主義思想の受容にあたって、「植民地性の極限を体現し」（李）、植民地化による政治的状況の中に常に巻き込まれていた。しかしながら、女性たちの生に光を当てる際、日本と同様に「自身の運命を自身が決定するという意志を見せ」（李）ながら社会主義に傾倒する女性人物が同時代において描かれていたことが指摘された。そして、当時の社会主義運動に身を投ずる女性たちにさらにフォーカスすると、「闘士」を目指して行動に出た女性党員たちが直面した、「ハウス・キーパー」になることで、自らの身体と「貞操」を組織に献げることが「解放」への意志を示すこととなるという女性身体を搾取する構造に関しては中谷いずみ氏の「階級闘争と女性解放の夢」の中で報告された。

性をめぐる言説（イデオロギー）は常に書き換えられている。コロンタイの思想が当時の日本社会をあれほど震撼させた背後は、青鞜時代から声高に唱えられていた「恋愛・結婚イデオロギー」及びその啓蒙的な効果が、そのままでは維持されにくくなったということを示す現象として理解しても良いだろう。しかしそのように「発展した」マルクス主義ではあっても、女性に対する根本的な態度は、旧態依然としていて家父長制的であった。1930年代の性の言説を、その流動性と、それぞれの文脈にジェンダーを介入させることで現れるひび割れに十分留意しながら捉え直すべきだという議論が「セッション1」でなされた。

3. 1930年代の女性表現者たちの構え

それでもなお、女性たちはそれぞれの方法で様々なルートを通して表現を試みていた。「セッション2：交渉する表現主体とジェンダー」では、1930年代を生きた女性表現者に注目した報告が集められた。

笹尾佳代氏の「『女人芸術』の新人作家－社会運動と〈文学〉の交渉」は、『女人芸術』でデビューした新人女性作家たちのテクストを取り上げた。とりわけ女性労働者の描かれ方に焦点を当てて、均質でステレオタイプの女性性と重なりにくい身体の表象を提示してみせ、プロレタリア文学としての多様性と、運動の周縁に見られる亀裂と共闘の困難について論じた。星野幸代氏の「“閨秀作家”凌叔華の1930」は同時代の中国人女性作家の凌叔華とその人生を取り上げた報告である。若き秀才で一躍作家デビューを果たした凌叔華は、主として男性知識人側から「貞淑」（“闺秀”）な作家として評価されたが、プロレタリア文学を書くことを選択しなかった理由で80年代に至るまで中国文学史では抹消されてしまった。報告では、アメリカ人男性との叶わぬ禁断の恋や、ヴァージニア・ウルフとの交流など、1930年代の出来事を辿り直しながら、「貞淑」を解体させると思わしき彼女の新たな生き方が浮き彫りにされていた。木下千花氏の「1930年代前半の日本映画産業における女性パイオニアの可能性－入江たか子のスター・プロダクション再考」は、映画領域での女性表現者に目を向けた報告であり、30年代のスーパースターで女優の入江たか子が、初の女性プロデューサーとして独自のプロダクションを率いた経緯とその再評価を行った。演じさせる側に女性が立つことがまだ困難であった時代に、入江たか子は、女優のスター性を力（資本）としたという。独立のプロダクションを創立した彼女の行動は、フェミニズムと呼応するパイオニア的な役割を果たしたというように、再評価が行われた。

今日のような表現の自由がまだ手に入れられていない1930年代において、女性は、ほとんどの場合、性的な存在として有標化されたり、凝視される客体として消費されたりすることを通してしか可視化されてこなかった。公の場に出て自らをさらけ出し表現しようとする女性たちは、そういう自分に向けられるまなざしに対して、挫折と妥協を味わいながら交渉しつづけてきた。交渉は社会運動の場でだけではなく、文学、映画などの創作の場で、すなわち現実の出来事を語り直し、パフォーマティブにフィクションへ置き換えるプロセスのなかでも行われたのである。「セッション2」のキーワードの「交渉」はこのように理解することができるだろう。

4. 1930年代の『女人芸術』という錯綜した場

こうして行われた女性表現者たちによる「交渉」は、1930年において多領域にわたって水平的な広がりを見せた。最後の「セッション3：女性知識人の1930年前後」では、雑誌『女人芸術』に注目した報告がなされた。『女人芸術』の性格が「大正期のリベラル・フェミニストや左翼女性知識人、またモダニズム系の作家など、集まった女性たちの立場は実に多様であった」（飯田）とまとめられたように、「女性」というカテゴリー内に多様性が重層的に現れる場へ、議論が進められたといえる。

コメンテーターで『女人芸術』研究のパイオニアである尾形明子氏は、「『女人芸術』は、創刊者の長谷川時雨が女性のための雑誌という理念のもとに、女性であることを唯一の条件として広く執筆者を募ったため、立場の異なる女性たちが集結した場になった」と述べると同時に、研究の対象としては、「『青鞜』に比較して『女人芸術』にたいする関心度が驚くほど低かった」と語った。その理由は、尾形氏より直接回答していただけなかったのだが、おそらく女性の連帯より、個々の立場の相違が際立つ『女人芸術』の、この一括りにしてなかなか語りきれない複雑性にあるだろうと考えたい。複雑性は時に撹乱を招致し、トラブルを引き起こす。『女人芸術』における複雑性そのものについての解釈と再検討が必要だろう。「セッション3」はまさにそれに対する応答であった。

飯田祐子氏の「〈女性〉の分裂と集合をめぐる闘争」は、『女人芸術』のなかで複雑性が最も典型的に前景化された「アナ・ボル論争」に着目し、女性ジェンダーと階級が組み合わされた形で展開された『女人芸術』でのアナ・ボル論争の力学を分析しながら、論争から顕在化された「女性」カテゴリーが持つ複雑性と雑種性を検討した。

もともと男性知識人がリードした左翼運動の中から生まれたアナ・ボル論争だが、『女人芸術』の場においては女性知識人たちに吸収され、「彼女たちの言葉の中に絶え間なく浸透しつつ、広がりを見せ」（飯田）ていた。結果的には、男性運動家によって提起された大衆化論争の枠組みから出るものではなかったようにも見えるが、枠組みからはみ出ること自体、当時の彼女たちが目指していた目標ではなかったのかもしれない。飯田氏は、『女人芸術』におけるアナ・ボル論争は左翼思想の紹介にとどまらず、女性ジェンダーの機能と組み合わされて展開していたことを確認し、その上で、女性たちがかつて大正期の論争で繰り広げられた自己実現のための言説と異なる言葉を得て声を上げるという新たな表現の通路が『女人芸術』の中で開かれたと指摘した。そのプロセスにおいて、「自己発見ではない移動する主体」（飯田）が再発見され、『女人芸術』の「女性」というカテゴリーの、アナとボルの対立に囚われない多数性が生み出しつづけられていたのである。

さて、最後のサラ・フレデリック氏「『女人芸術』のインターセクショナリティー階級、エスニシティ、性、意識と『女人芸術』のフェミニズム」は、同様に『女人芸術』の複雑性を検討した論考であり、女性作家たちによるセクシュアリティの表現に焦点を当てた。『女人芸術』の女性作家たちは労働者運動やプロレタリア文学を書きながら、性に関する肯定的な見方を構築しようとしていた。そこで描かれているセクシュアリティの表現は、これまで家制度を批判する文脈で評価されており、横並びに展開したマルクス主義との間にせめぎ合いや緊張を生じさせた原因でもあったという。フレデリック氏は、女性作家たち自身によるセクシュアリティの表現を「快楽の問題」と見なす視点を提示し、マルクス社会主義の枠組みだけではない複数の力学が交差する様を、中本たか子「赤」と太田洋子「聖母のいる黄昏」のテクストを読解しながら指摘した。すなわち、『女人芸術』のセクシュアリティの表現を振り返ると、性的搾取と異なる、性的快楽への回路が女性作家たちによって拓かれているのではないかという見解を示したのである。

5. おわりにかえて、次世代パネルの若者たち

1930年代の文化生産を女性知識人や女性表現者たちに光を当てることで問い直すという主旨での今回の国際シンポジウムに参加して、私は、ジェンダーの文化史を研究する際の方法論としての有効性を、現在だけではなく、より長い歴史的射程の中で再確認することができた。すなわち、ある特定の時代に生まれた主流の言説や大きなうねりに対して、ジェンダーを介入させる際に立ち現れるひび割れをノイズとしてではなく、文化の共約可能性として掬い上げる作業の必要性である。また、女性は「一枚岩ではない」という主体に関する知見は、1990年代以降のポストフェミニズムの基盤を支える重要な認識だったものの、半世紀以上前の『女人芸術』という場で先行世代の女性たちによってすでに実践されているという啓示を得た。さらに、「女性」カテゴリーが持つ複雑性と重層性は、『女人芸術』時代の女性表現者たちからだけではなく、彼女たちを見詰め、彼女たちを再発見しようとしたそれぞれの発表者（全員女性研究者）の振る舞いにも現れていると思った。当事者性に基づく作家論的なアプローチから、作品論そしてコンテクスト文化論へ、関心のもち方がまちまちでまさに多様化していると感じた。

多様性は初日（20日）午前の次世代パネル「アジア圏文化における身体＝ジェンダー」においても受け継がれていた。次世代パネルはアジアというフィールドを前景化しつつ、戦後の1960年代から2000年代にかけての文化・映像・メディア表象などの複数の広がりを有する議論の場を生成した。1960年の男性誌『メンズクラブ』を考察した游書昱氏、1970年のポルノグラフィティ映画を取り上げた王温懿氏、2000年代のテレビドラマ「やすらぎの郷」を取り上げて老いの表象を分析した中山佳子氏、そして腐女子に注目した吳静凡氏の報告のいずれも、戦後から現代の文化事象をジェンダーに注目することで析出していこうとする個性の光るアクチュアルなテーマ設定であった。一方で、コメンテーターの光石亜由美氏が指摘したように、それぞれの分析に当たって、その歴史的な系譜での位置付けが明確にされていなかった点でやや不十分さが残ったが、シンポジウム全体から振り返ってみれば、むしろ『女人芸術』の後の時代におけるジェンダー秩序の質的量的転換を対照的に考えさせられる貴重な契機を作ったのではないかと考えた。

前を歩いてきた女性たちの歴史を記述し、彼女たちへ尊敬を払う。そして、性（ジェンダー）にたいする思考を弛まず倦まず続けていく。というのは、国際シンポジウム「1930年前後の文化生産とジェンダー」が私に届けたメッセージであった。そして、あなたにも届くように。

1｜ http://www.outjapan.co.jp/lgbtcolumn_news/news/2017/10/5.html 最終アクセス、2018年2月2日。